

二人役で、大組頭・御持方頭・御先手頭から之を兼ねた。其の初めは不明であるが、正保四年岡島五兵衛一信が御異風頭を命ぜられ、役料二百石を賜はつた。承應二年福島武左衛門亦之に任ぜられて二人となり、萬治三年七月岡島免ぜられ、齋藤中務忠明之に代り、寛文六年大橋又兵衛恒成、九年石黒太郎左衛門信重、延寶元年有賀基六郎政寛と追々命ぜられた。此等は皆御先手物頭が之を兼ね、役料二百石を賜はり、總べて御異風の名目であつた。五年三月十一日半田惣兵衛景弼が、御先手物頭から兼帯するに及んで、頭料を別に賜はることが止み、職名を御異風城許と唱へて、爾後全く兩人役となつた。

イフク 衣服 ↓レイフク 禮服。リヨソウ 旅装。カジシヨウヅク 火事装束。
イブラクイチマキ 異部落一卷 一册。原本の外題には、藤内頭並廻藤内・非人頭勅方、革多寢纏一卷とあつたが、昭和七年石川縣圖書館協會に於いて此の書を出版した際、校訂者が標題の如く改めたものである。此の書に記載する所は、僅々三十一條に過ぎぬが、その内容は藤内・非人・乞食・物吉・穢多・舞々等の沿革職分に亙つてゐる。

イブリハシ 動橋 江沼郡能美境の中に屬する部落。邑名は動橋と稱する橋があつたに因る。礎橋・振橋又は不忍橋にも作る。

イブリハシ 動橋 江沼郡動橋の官道、動橋川に架する橋梁。回國雜記に、「しき地いみなみうち過て、いぶりはしとてあやうくいぶせき橋に行かゝりぬ。行登てふめばあやうきいぶり橋命かけたる波の上哉。」と記し、大略水經に、昔は一本木にて架け、人渡ればう

ごく故にいぶり橋というたとあるが、後世は石橋となつたと見え、江沼志稿には、石橋長さ二十二間幅二間高三間となつて居る。

イブリハシガハ 動橋川 江沼郡の南境小大日山の東方溪谷に發して北流し、大土に於いて西北に折れ、中津原に至り再び北流し、桑原で東方から来る宇谷川・那谷川を容れ、動橋に至り、中島から柴山灣に入る。流程二七

尺。菱刈紀陣に、昔は片山津領で柴山灣に落ちたが、そこに新田を開いて中島の地に通ぜしめ、後更に毛谷川尻の領に移したとある。

イブリハシジヨウ 動橋城 江沼郡動橋に在つた。織田軍紀天正四年の條に、「佐久間玄蕃允加州へ入部せしに、一揆等敷地天神山の城を乗取。柴山・佐久間押寄、天神山を攻落して一揆等を追拂ふ。一揆等又イブリ橋の城に籠る。勝家・盛政すゝんでイブリ橋へ押寄、又一揆等を追拂て數百人の首を切取。」と見え

イブリハシタテハキ 振橋帶刀 北陸七國志天文廿一年朝倉宗滴加賀に出馬の條に、一揆大將振橋帶刀等が千足城に寄つたことがある。帶刀は江沼郡動橋村の人であらう。又政春古兵談に、天正八年佐久間盛政が松任で賊魁を誘殺した時、動橋の行近は出奔したとある。帶刀と行近とは同一人か若しくは父子かであらう。

イブン 莖文 ↓ワタナベイブン 渡邊莖文。

イブンガツサン 異文合纂 一册。賀州淺井繩手之様子覺書、那谷寺并御幸塚由來付小松近邊由來之事、成田三政家傳書、利家様御武功之様子書上、利家遺言書、村井豊後長頼

武功書等を書集めたものである。
イブンロク 異聞錄 一册。補部屋金五郎著。加越能に聞えた噂人・奇談等を集録したものである。

イヘガカリ 家懸 ↓ムラマンゾウ 村萬

イヘガラチヨウニン 家柄町人 加賀藩で特別の由緒を有し、殊遇を受ける町人で、年頭に藩侯の謁見を許され、銀座役・町年寄等に任じ、町役銀を免ぜられ、又扶持米を給せられるものもあつた。片町の宮竹屋伊右衛門・木倉屋長右衛門、石浦町の鎗屋九郎助・南町の中屋彦右衛門、上堤町の三箇屋九郎兵衛・越前屋孫兵衛、下堤町の喜多村彦左衛門、十間町の本吉屋宗右衛門、武蔵辻の武蔵屋庄兵衛、袋町の竹屋仁兵衛・金屋彦四郎・淺野屋次郎兵衛、越前屋喜右衛門、袋町の菓子屋吉藏、中町の紙屋庄三郎、森下町の龜甲屋興助等がその主なるものであつた。

イヘキヨ 家清 加賀の刀工。家清と切る。應永後の人。

イヘサダ 家定 加賀の刀工。家定と切る。應永後の人。
イヘザネ 屋眞 加賀の刀工。加州住屋眞と切る。永正頃の人。
イヘシゲ 家重 加賀の刀工。初代家重は三代陀羅尼勝家の子。通稱善三郎。家重又は加州住家重と切る。慶長頃の人。二代家重は初代家重の三男で本家を繼ぎ、亦善三郎と稱した。加州住藤原家重と切る。正保元年歿。その子三代家重は、通稱松戸善三郎。承應三年前田利常が製作せしめて越中瑞龍寺に寄進した二十二刀中には加州住藤原家重造と銘

じ、その他加州住陀羅尼藤原家重・善三郎家重とも切つたものも見える。寛文元年伊豫大掾を受領し、橋勝國と改銘、同十二年に歿した。
イヘスケ 家助 加賀の刀工。家助と切る。天文比の人。

イヘダシヨウ 家田庄 承久三年注進の能登國田數目録に見え、羽咋郡に在つた。能登國田數目録解に、家田は今詳かでない。ヤカタ又ヤダなど讀むか。郡の土田庄に館村また矢駄村があり、賀茂庄に矢田村、邑知院に柳田村がある。これ等或は縁あるか。或は和名抄の高家郷でないかと説くものもあると記する。

イヘタダ 家忠 加賀の刀工。家忠は初代陀羅尼家重の二子で、初めて洲崎氏を稱した。通稱吉兵衛、賀州住藤原家忠と切る。明暦元年歿。二代吉兵衛家忠も亦賀州住藤原家忠と切る。寛文十年歿。三代家忠は二代家忠の直系ではなく、元祿の吉兵衛家平の養子であつたものが別家して、五十年中絶した家忠銘を復活したものである。賀州住家忠と切る。俗名を洲崎四郎兵衛といつたが故に、從來四郎兵衛家平と混同せられた。天和三年既に死亡してゐたことは明らかであるが、その歿年は傳へられぬ。

イヘタダ 家忠 大聖寺の刀工。山田氏。賀州大正寺住七左衛門尉家忠寛文元年八月吉日、又は賀州大正寺住七左衛門尉家忠以石見鉄作之寛文元年二月吉日など、切る。延寶八年二月十四日歿。

イヘツク 家次 能美郡の刀工。家次・加州住家次應永九年と切るもの、家次永享二年